国際学術交流

1．国際学術交流の現状

当研究所がここ数年継続して行っている諸外国との共同研究には、特別研究として次の２件がある。

1）南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的研究
2）アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力

また、文化庁が実施する「アンコール文化遺産保護共同研究」も当研究所が協力しており、本年で６年目を迎えた。さらに、文部省科学研究費補助金として次の４件を国際共同研究として実施した。

1）中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究
2）陶磁器文化の交流に関する科学的研究
3）中国長白山の巨大噴火年代と渤海に関する年輪年代学的研究
4）日韓古代における埋葬法の比較研究

当研究所が外国の諸機関・研究者と行う学術交流も近年は特に多岐におよび、ほとんど全世界的なものになってきた。1998年度には、当研究所が招聘した研究者、および先方の研究目的での来訪者は計15ヶ国、延べ65人であり、当研究所から外国への出張者は17ヶ国、延べ84人にのぼっている。来訪者は奈文研の特別研究、科学研究費国際学術研究、国際交流基金、（財）日本国際協力センターの招きによるもののほか、先方機関からの来訪者である。

自治体職員協力交流事業特別研修　地方公共団体、自治省および（財）自治体国際化協会が行う「自治体職員協力交流事業」にもとづき、海外から文化財保護関係機関の職員を受け入れて、研修を行うもので、文化庁および諸機関が協力しているものである。当研究所も1996年度から受け入れを実施しており、本年は奈良県と宮城県が受け入れた陝西省考古研究所の２名と、山口県が受け入れた山東省博物館の１名が９月７日から11日まで特別研修を受けた。わが国における文化財行政の現状、保存科学、情報処理等について研修をしたほか、平城宮跡、藤原宮跡、飛鳥資料館等の見学をした。

(財)日本国際協力センターが実施する「博物館技術コース」への協力　標記の研修の一部を引き受けて、９月29・30日の２日間当研究所で実施した。内容は、日本における史跡および埋蔵文化財の保存と遺跡博物館の現状などについて見学と講義を行った。パキスタン、タンザニア、グアテマラ、チリ、マケドニアからの６名であった。

（工楽善通）

トータルステーションを用いた桂宮２号宮殿の実測風景

2．中国社会科学院考古研究所との共同研究

当研究所は特別研究「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」の一環として、中国社会科学院考古研究所と共同研究を進めている。

98年度は桂宮２号宮殿の第２次調査として、正殿北の後殿の発掘調査を行った。調査は98年秋と99年春の２回に分けて実施し、秋は３名、春は４名の研究員をそれぞれ派遣した。詳細については、本書４～６頁を参照されたいが、桂宮２号宮殿は正殿、後殿が南北に並ぶ、漢長安城でも類をみない構造であることが判明したことは、大きな成果である。なお、98年夏には劉慶柱副所長（当時）ほか５名の中国側研究員が来日して講演会を行った。

今回で漢長安城の共同調査は２年目を終えたが、調査自体は円滑に進行できるようになった。今後さらに調査法や遺物の取り扱い、測量手法など基本的な考え方の面で齟齬をなくしていくことが求められる。98年度は新たな試みとして、トータルステーションを用いた調査区全体にわたる遺構の測量と実測を行った。

また、劉慶柱氏は98年秋に所長に就任され、99年春に就任した町田所長とともに、日中両国における総括者が所長として指揮にあたることとなった。これまでその任にあった任式南、田中琢両前所長の労に感謝するとともに、研究のさらなる発展を期待したい。　（玉田芳英）

3．遼寧省文物考古研究所との共同研究

鉄器及びその他の金属器の保存研究を課題とした遼寧省文物考古研究所との共同研究も3年目を迎えた。今年度は、まず、日本側が、発掘調査中の喇嘛洞遺跡に赴き、金属器等の出土状況を具体的に把握した。喇嘛洞遺跡から出土した金属器については、従来から、良好な保存状態であることが知られていたが、現地では、鉄器・青銅器のみならず、人骨等も良好な状態で残っていた。今回の調査により、これには、アルカリ土壌という遺跡の環境が関係していることが確認され、遺物の保存状態と遺跡の土壌環境との関連について、重要な知見を得ることができた。

鉄器の保存処理については、出土遺物の共同研究を目的に、奈文研での研修と遼寧省文物考古研究所における技術指導を実施してきたところであるが、今年度は、特に鋳造品の製作技法について、X線CTを用いた分析を試みた。しかし、資料が大きすぎたため、X線の透過性が悪く、明瞭な結果が得られなかった。今後、破片等の小さな資料について検討を進める予定である。また、青銅製品の保存処理についても、基本的な技術指導を奈文研で実施した。

喇嘛洞遺跡では、300基を越える墓が、かなりの規則性をもって築かれており、今後、その構造や時代的変遷等の遺跡に関する考察、出土遺物の分析、保存処理について、共同研究を進めていくことになる。

なお、10～11月には、中国側一行が来日し、出土遺物に関する日中の比較検討を行うとともに、発掘調査成果を中心とした、「遼寧考古の最新成果」と題する講演会を開催した。

（小林謙一）

喇嘛洞遺跡

パガン　シンビーシンの建物修復

4．南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

この研究はミャンマー連邦文化省考古局との共同研究であり、5年目となった。これまで主として研究者の交流を行ってきている。本年は、共同研究のミャンマー側の責任者である考古局長ニョンハン氏、考古局マンダレー支局副長ソールウィン氏、ヤンゴン大学歴史研究センター研究員サインミン氏を紹聘した。ニョンハン氏は1999年2月3～24日まで22日間、古代寺院・都城遺跡の発掘・保存整備方法などについて意見交換を行った。ソールウィン氏・サインミン氏は2月3日～3月24日まで50日間で、主に飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施している発掘現場において、調査・研究方法や測量方法などについて具体的な意見交換・検討を行った。

奈文研からは、安田・岩永・森本の3名が1999年1月24日～2月4日に、考古局とマンダレー・パガン・ピューを訪れた。著名なインワ遺跡群・ベイダノ遺跡・シュリケトラ遺跡などの他、マンダレー郊外の青銅器・土器を副葬する墓群であるナウンガン遺跡やパガン近郊の旧石器時代遺跡（タンタウンゴレ）・新石器時代遺跡（レッパンチーボー）などの調査・整備状況をみることができた。またパガンでは、仏教遺跡の復原整備が急ピッチで進められており、その修復現場や主要遺跡について調査することができた。

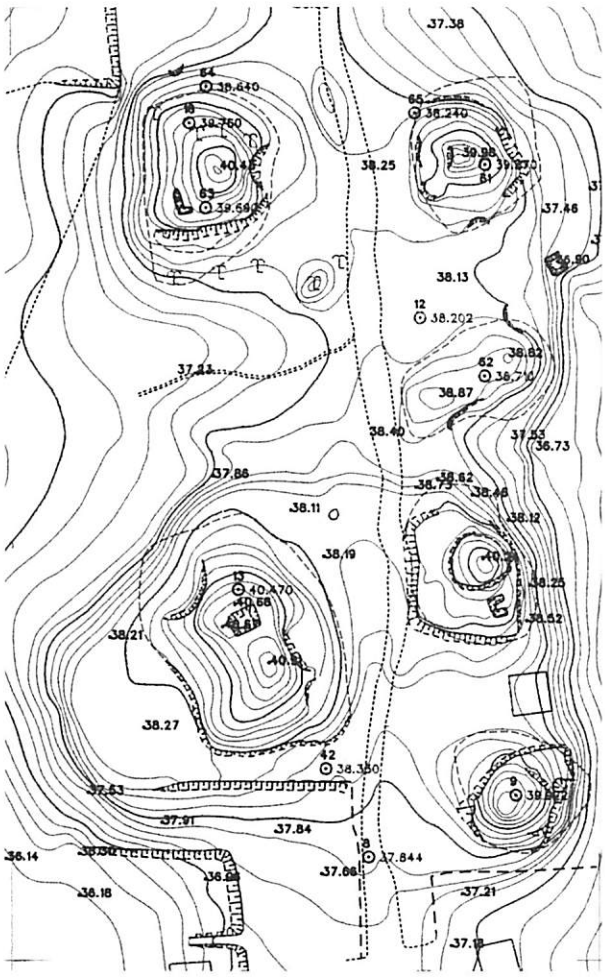
これまで紹聘した研究者は10名を越え、各地の考古学調査の責任ある立場で活躍されており、共同研究の成果があがりつつある。

（安田龍太郎）

5．アンコール文化遺産保護共同研究事業

1998年度は、1995年に発見されたタニ窯跡群の予備調査の最終年度で、地形測量図の最終チェックのため、8月17日～8月29日の間、第1回目現地調査を行った。この現地調査によって窯跡群の地形図が完成し、編集作業と解説冊子の作成を始めた。12月15日～12月21日には第2回目の現地調査として、文化庁特番『いま！世界遺産への旅』でタニ窯跡群を取材するための調整と協力を現地で行った。第3回目の現地調査は2月12日～2月20日の間に行い、1999年度に行う発掘調査の体制準備を行った。

招聘事業は例年通り王立芸術大学卒業生3名を10月5日～12月24日の81日間招聘した。同じ時期にロンドン大学からElizabeth Moore氏を招聘し、文化庁の招聘で来日中のAng Choulean氏と国際セミナーを11月27日に研究所で行った（本書57頁参照）。　（西村　康／杉山　洋）



タニ窯跡群A群地形測量図　1：700

在外研修の成果

古代東アジアにおける冠帽等の装身具に関する研究

毛利光俊彦／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1998年9月1日から11月25日にかけて中華人民共和国に出張し、冠帽から靴に至る各種の装身具について、出土品や古墳・石窟寺院の壁画・彫刻などを調査研究した。訪問地は北半の吉林・遼寧・河北・河南・陝西・甘粛各省と、南の江蘇省に及んだが、中国社会科学院考古研究所や各省の研究所・博物館の厚誼によって、多くの成果を得ることができた。

冠帽については、吉林・遼寧両省で、高句麗や鮮卑の金属製品を種々実査できたのが第一の収穫。甘粛省莫高窟では、供養者像や説法図に傾注し、隋・唐代の中華の制と、周辺諸国人の夷俗との対比をみた。各地で展覧中の俑や彫像を通観した結果、文・武官以外に侍臣を冠から特定できることにも気づいた。

腰帯については、各地で各時代の遺品をみた。陝西省の白玉鐶帯は北周（557-581）で、鐶帯としては最古級である。唐代には丸鞆・巡方の銙板が一般化するが、丸鞆の起源が鐶帯の円形銙板にあるのではと予測している。なお、唐の乾陵（第3代高宗・則天武后陵）の石人がしめる帯の丸鞆・巡方は、腰佩をとりつける右側のみにあることに気づき認識を改めた。

靴については、日本・朝鮮半島の古墳出土金属製品に、前後綴と左右綴があることから、その起源を探した。皮や布の遺品は漢代からあったが、いずれも前後綴。新羅の左右綴の探求は今後の課題である。

唐・乾陵の石人の腰帯と腰佩